

第 4 回 人生 85 年 ビジョン 懇談会  
モレション 委員 発表 資料

平成 20 年 2 月 20 日 (水)

## 第4回 人生85年ビジョン懇談会

(フランソワーズ・モレシヤン)

### 第一章 若いうちに準備する老後

「よく生き」「よく老いる」ためには、子どもたちを教育しなくてはならない…それが私たちの残すべき「人生の遺産」と言えるでしょう。

私たちは子どもたちに素晴らしい芸術作品と同時に自然の素晴らしさも学習させなくてはなりません。「美しいもの」を見せるだけでなく、それに関連した文化の学習に重点を置くことが大切ではないでしょうか。

最近では経済が重視されて、文化教育が軽視される傾向にあります。これは半世紀後の老人問題に大きな悪影響を及ぼす懸念があります。《現役》として活躍するときには経済も大事でしょう。でも、人間の後半の人生こそ、文化が最も重要な要素になってくると考えます。

子どもたちすべてが素晴らしいプロの音楽家や詩人、また

はエンジニアや職人になるわけではありません。でも、音楽家になれないのだからといって、音楽への好奇心の芽を摘むことは許されません。詩人にならなくても、詩の好きな子ども、エンジニアにならなくても、科学への好奇心と情熱を育て、職人にならなくても、物作りの楽しさと技術の素晴らしさを教えます。こうした文化的好奇心と文化的教養が、人生という冒険に出るときに必携非常バッグとなるのです。危機に面したとき、必要なのは心の豊かさです。老後を迎えることもひとつの危機といえるでしょう。

共立女子大で12年間教壇に立ちましたが、新学期には生徒たちに、いつも次のようなテーマで作文を書かせました。

「あと24時間しか、生きられないとしたら、何をしますか？」  
生徒たちには「命に期限があることを知ると、人生の本質、何が一番大切なのかを知る」と説明しました。

興味深かったのは、こういう重いテーマであっても、生徒たちはまったく驚かなかったことです。まだ若く、柔軟な心の中には、音楽でも絵画でも、また哲学でも、いわゆる真面目な教養文化がストレートに問題なく入っていく…それが

実感できました。最近では若者に迎合して、マンガなどを取り入れてわかりやすい教育を目指しますが、バツハやゴージャンといった芸術文化が、若者には《難しい》と考えるのは大人たちの勝手な推測に過ぎません。

若い頃のこうした学習が人生を考えたり、構築する上で非常に大切だと考えます。若い頃に学んだことが、後の人生で退屈や孤独や憂鬱と闘える要素となり、さらには老後の経済的不安をも和らげるのではないのでしょうか？

## 第二章 死の概念を教育する

人類20世紀までの長い歴史上、東西を問わず、どの文化圏でも「死」という概念に脅かされ、天国、あるいは輪廻という信仰を生んできました。西洋社会では「死」についてのテーマは、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールのように多くの絵画の上でも重要なテーマでした。音楽ではモーツァルトのレクイエム（鎮魂歌）のように死に際しての生の虚しさを嘆きま

す。

フランスにおいて、今でも修道僧の間での日常の挨拶はボンジュールではなく、「我が兄弟よ、私たちはみないつかは死ななくてはならない」*il nous faut tous mourir, mes freres.* という言葉です。

つまり、人生は生まれたときから教育や宗教や、さまざま  
な人生の生活を通じて「死」を受け入れることなのです。

もちろん、21世紀のメディアを通じて、こうした「死」の  
概念の教育方法や伝達手段は大きく変わったでしょうが、基  
本的に人間の「生と死」の概念は変わらないものだと思います  
す。どんなに技術が発達しても、誰もが生まれて死ぬのです  
から。ということは、私たちは「よく生き」「よく死ぬ」た  
めの教育や社会構造を今まで同様に必要としており、哲学的  
イデオロギーとしての判断を誤ってはなりません。「死の概  
念」とは同時に「命」の大切さを教えることでもあります。  
昔と較べて人間の寿命が延びている現在、そうした精神的  
社会構造がより必要になるでしょう（現実には消滅方向に向  
かっています）。

さらに、今、世界はグローバルになっています。国を隔て

る国境がなくなっていくことは、よいことでもあるでしょうが、アイデンティティとしての基準を失い、善悪の基準も失いつつあります。

先端技術によって、努力や我慢することなく、若者たちは欲求の有無にかかわらず、ボタンひとつでなんでも手にすることが出来る時代です。善と悪という考え方さえ、地球上から消滅していくような……。

### 第三章 老いを受け入れる

いつまでも若くある方法は世の中に溢れています。中でも健康は言うまでもなく重要なことですが、「若く老いる」上で大切なことは孤独に陥らないことであり、同世代、またはより若い世代との交流を深めなくてはなりません。そのときに必要なのが、広い意味での文化的教養ではないでしょうか。今後、身体的病気などで人生を終えるよりも、孤独や鬱といった精神的原因での死が増えることでしょうか。

老いは決して愉快なことではありません。肉体の柔軟性を

失い、精神も鈍化します。例えば個人的な例ですが、エアロビクスでのステップを覚える場合でも、一度で覚えていた新しいステップが今では3度も4度も繰り返して練習しなくては体が覚えてくれません。

しかし、老いを嘆いていると、嘆くほどに老いは悪化します。

誰にでもやってくる老いを恥じることのない社会、年齢をネガティブに考えない社会、老人が威厳を持って生活できる社会作りが必要でしょう。かといって、元気な老人を演出するあまり、「老人の冷や水」というような子どもっぽい無理をしなくてもよい社会です。

自ら、老いをちよつとしたユーモアを交えて捉えられるようにする、そんな余裕も社会の中で必要です。

多少自虐的なユーモア。日本でも、こうしたお年寄りに人気のコメディアンがいますが、誕生日のグリーティングカードなどには「あなたはいつも変わらずに美しい」とあって、裏を返すと「ただ、前より少し時間がかかるけど…」というのがあります。他人を傷つけるのではなく、自らを笑い飛ばす

ようなユーモア。老いは真剣に考えれば考えるほど、ある意味では辛いことばかり。気持ちに余裕が持てる、そんな社会的雰囲気も必要でしょう。注意が必要なのは、決して若者が老人を笑うようなユーモアではありません。

#### 第四章 元気な老いへの準備

健康と頭脳（記憶）、そして経済…この三つが長い老後のキーワードとなっています。

では、どのように準備すればよいのでしょうか？

最近のヘラルド・トリビュン紙で読んだのですが、アメリカとヨーロッパの統計では…煙草を吸わず、運動をして、適度のアルコール、野菜と果実を多く摂取すれば、14年ほど寿命が延びるといいます！

何事にも真剣に取り組む日本人ですから、こうした長寿への努力をすれば、誰もが14年の寿命を延ばしそうです。日本の現在の平均寿命が男性78歳、女性85歳…きつと男性92歳、女性99歳も夢ではありません！



人生85年どころか、今から私たちは90年、100年計画を立てなくては！

すべての定年退職者が夢の自由時間を自由に楽しく過ごせるわけではありません。せつかく自分のために使える時間が出来たときには…経済的問題が出てきます。…残りの長い人生をどのように経済的に「支える」のか？

住居、食料、そして冷暖房…今ではガソリン、小麦などの物価高への不安があります。

さらに、人生は食べて、飲んで、寝るだけではありません。私たちは動物園の動物ではありません。劇場や美術館に通い、旅行できるだけの経済の余裕をどうするのか？個人的に文化的行為のない人生は人生でないと思います。

今後は老人たちの「引きこもり」も、ますます社会問題化するでしょう。

また、メディアやマーケティングの世界での「老人は経済的に余裕がある」という常識は捨てたほうがよいでしょう。どれだけ銀行に貯蓄していても、多くの人々にとって、収入が途絶えた中で、それは長い老後の資金であり、問題は、あ

と10年なのか、20年なのか、または30年なのか、わからないことです。

こうした老人たちの財布を狙うような企業キャンペーンなどにも、なんらかの規制（または反省）が必要では？

老人たちへの悪質な詐欺事件も増えています。こうした犯罪などには厳しい対処も必要でしょう。

こうした社会から身を守るためには老人たちの頭脳（記憶）と文化的教養といった判断力も必要になってきます。

前述しましたように、文化：読書、芸術鑑賞などを樂しめるノウハウとは若い頃に養うものです。定年を迎えた世代に向けての援助も必要でしょう。劇場、美術館、交通手段などの援助です。老人が安心して文化を樂しめる社会づくりです。

もうひとつ大切なのが、孤独を回避する方法。定年退職者は概して仕事での付き合いの友達が一瞬にして消えてしまいます。人間関係の構築を新たに考えなくてはなりません。NGOなどのボランティア仲間を作ると言うのも、そのひとつでしょうし、趣味や文化というのも、こういうときの仲間づくりに生きてきます。または田舎暮らしで、自然を通じて

新たな地域で余裕のある人間関係を作るとか：地方（特に過疎地など）での受け入れ態勢も社会的に考えていかななくてはならないでしょう。

## 第五章 ゲットーの回避

また若者と老人、あるいは都会から田舎にやってくる定年者を迎える地域において、ゲットーのように世代や《よそ者》を区切ってしまうような社会にしないことです。

すでに核家族や個食が社会的問題となつていますが、これ以上の核家族化は老人問題にとつても大きな障害となりま  
す。

若い母親が生まれたばかりの赤ちゃんにミルクでなく、コココーラを飲ませるような事件さえ起こっています。一方では老人たちの孤独死があります。このような若い母親と老人たちの交流があれば…：このような愚かしい事件は回避できるのではないでしょうか。

基本的な生活のノウハウや教養が伝承されない社会、それ

が老人のゲットーを作る社会でもありません。

タテ型社会という日本、アジア固有の問題があります。古い道徳観のために、過剰な敬意を求める老人を若者たちが煙たがる…そんなことにもなってしまう。

以前「猫が行方不明」というフランス映画がありました。若い女性の飼っていた猫が行方不明になったことから、近所の老人たちも猫探しに参加して、暖かな交流を描いた作品です。舞台はパリの下町でしたが、都会での老人の孤独はヨーロッパでも大きな問題になっています。

ゲットーを作らない社会。それは都市計画の面でも重要なテーマでしょう。

先日、訪れた金沢の幼稚園では地域ぐるみで、開かれた幼稚園でした。近所の老人たちが幼稚園に遊びに来るのです。そこで老人は子どもと遊び、また郷土料理を作ったりするのです。

少々、論点が広がりすぎましたが、最後に目指すのは「威厳のある死」を迎えることができる社会と行うことでしょう。